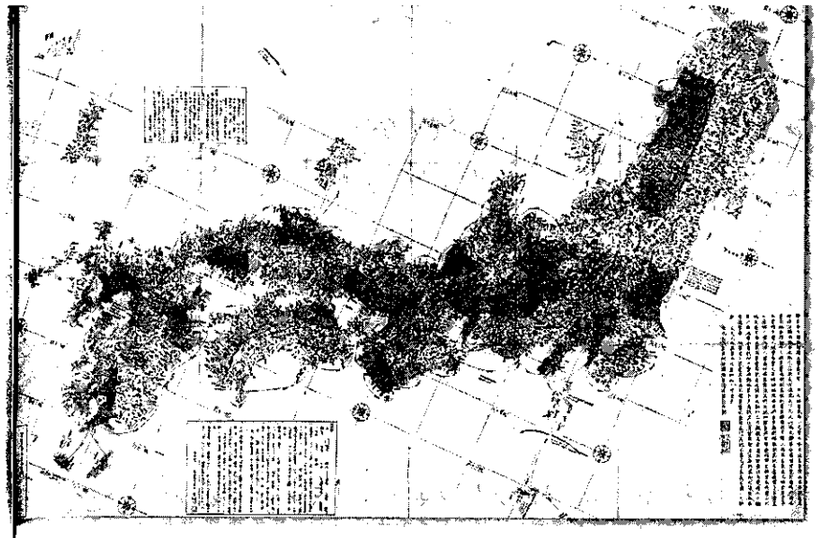
千古一業に生きる
長久保赤水 七十歳の家訓

三百有余年もの昔、常陸国に生まれ、本格的な日本地図を製作。江戸庶民の経済活動や幕末の志士に道標を与えたのが儒学者・長久保赤水である。学問分野を跨ぐ偉業は国内外で尊敬を集めるも、明治維新を境に歴史に埋もれてきた。自筆の地図に「千古一業」（千年万年、永遠に残る一大事業）の印を捺した赤水。四十年の歳月をこの顕彰に捧げる佐川春久氏の語りから、稀有なる先人が命を燃やした大事に迫る。



『改正日本輿地路程全図』（寛政3年／第2版）
特徴は、実測ではなく先達が遺した数多の文献、初版に所蔵された地図資料、道行く人や学友たちのネットワークによって製作された〝編集図〟である点。本図の前年には『蝦夷之国』を完成させた〈文中資料提供：高萩市教育委員会〉

独創の人 長久保赤水

江戸時代中期、かの伊能忠敬より半世紀前に本格的な日本地図を完成させ、庶民の生活を向上させた人物がいます。水戸藩（茨城県）の儒学者・長久保赤水です。

「えっ、そんな人がいるの？」と思う方がいても無理はありません。事実、歴史教科書に登場するのは伊能ばかりだったからです。

二人の地図の違いを挙げるなら、まず伊能図は当人たちが各地を歩いて実測した〝測量図〟であり、幕府に提出された後も長く秘され、明治初年まで大衆の目に触れることはありませんでした。一方の赤水図は、多数の人や資料から情報を収集し、学問的に考証に考証を重ねてできた〝編集図〟です。

赤水以前の地図は、戦争や税の徴収に用いられた、言わば支配者の道具でした。赤水は幕府の許可を得て自らの地図を出版、それも二十四分の一に折り畳める形を採り、たちまち江戸庶民や志士たちに広まりました。吉田松陰が旅先から兄に宛てた書簡には、「これが無くては不自由だから買い求めました」という旨が記されています。松陰は赤水を先生と仰いでおり、その没後には常陸国を訪れ、墓参をしてから東北へ旅立っています。萩の松下村塾をはじめ全国の藩校で教材とされていた事実も鑑みるに、赤水図は明治維新のエネルギーを醸成したと言えるでしょう。

時は流れて戦後、進駐してきたGHQは、島根沖の竹島を領土から外せと政府に命じます。しかし、赤水図には竹島がはっきり描かれていました。外務省はこれを提出し、竹島は日本の領土だと主張。結果認められ、サンフランシスコ講和会議で四十九か国の署名・調印を受けます。赤水図が日本領土の確定資料となったわけです。

これらは赤水の仕事の価値を示すほんの一端です。ではなぜ、それが埋もれてしまったのか。

一つは、六十一歳で水戸藩の侍講（藩主に学問を講義し、政への助言も行う）に取り立てられた際、郷土を離れて江戸に移ったため、活躍が外に伝わりにくかったこと。もう一つは、水戸学の思想を継ぐ水戸徳川家の側近だったために、明治新政府が顕彰するわけにはいかなかったという事情でした。

二人の母から授かったもの

結婚を機に東京から居を移した私は、市の広報広聴係に配属された三十代半ば、郷土史家の先生から赤水の存在を教えられ、調べるほどにそのスケールの大きさ、独創性に魅せられていきました。

享保二（一七一七）年、赤水は常陸国の北端、奥州道浜通り脇の赤浜（現在の高萩市赤浜）に源五兵衛の名で生まれます。元は九州の大名・大友家の血筋ですが、戦に敗れ落ち延びる中で姓を改め、農民として赤浜に定住しました。

赤水の生涯は、家族との別れから始まります。四歳の時に祖父が、翌年には祖母が亡くなります。さらに八歳の時、父・善次衛門が次男だったため分家を余儀なくされると、間もなく可愛がっていた三歳の弟が夭死。翌年には母・繁が二十九歳で世を去ります。働き手を失った父はすぐ後妻に二十六歳の咸を迎えますが、翌年、その父も病に侵され亡くなります。赤水は十一歳までに五人の肉親を失い、天涯孤独の身となるのです。

これほど悲しい目に遭えば、まいってしまっても不思議はありません。そうさせなかったものは、〝二人の母〟の教育でした。

実母の繁は二代目藩主の徳川光圀の乳母を輩出した名家長山家から嫁いだ女性でした。生前、家で砂を敷いたお盆に名前を書かせたり、海岸の砂に文字を書かせたりして、学問に必要な読み書きを息子の身に遺してくれていたのです。

二人目とは、継母の咸です。父亡き後、惣領となった赤水は農作業をしながらも、本を読んでばかり。叔父たちから「百姓に学問は要らねえ！」と何遍も叱られますが、咸は「博打や遊興をするより、趣味で学問をするほうが上等でしょう」と一歩も退かなかったといいます。さらに、生前の善次衛門との約束を守り、死別後、実家佐藤家の両親から帰ってこいと言われても赤水を見捨てず働きました。繁に教わった読み書きと、咸の慈愛がなければ、赤水は一介の農民で終わっていたかもしれません。

寸陰を惜しみ五感で学ぶ

咸の働きに支えられ、赤水は十四歳で四㎞離れた隣村、松岡城下にある儒学者で医師の鈴木玄淳の私塾に通い始めます。近隣から集った学友（松岡七賢人）と、和漢の学問を修めていきます。

ただし農作業がある以上、晴れの日には読書に耽る時間はありません。それでも懐には常に経書を忍ばせ、寸陰を惜しんで暗唱していました。野に出ると目では農村の風景を見、手で馬の鼻取りをしながら経書の章句を口ずさみ、耳で聴きながら体に馴染ませ、鼻では野の花の匂いを感じ取る。夜には月明かりや蝋燭、線香の微かな灯りで勉学に励んだといいます。

没頭するあまり突然の雨に気づかず、干した穀物を濡らしてしまったとの逸話も残っていますが、後に寸陰の重みを実感したのでしょう、長男・藤八郎への手紙にこうしたためています。

「晩年に至っても学問を捨てないということである。ましてや年若い者は少しの時間を惜しんで学問に精を出さなければならない。学問のない者は百歳を経ても生きた甲斐はない」

当時、儒学を修めるには半生かかると言われました。その点、松岡七賢人は各自が分担して儒学を学び、互いに談論して凄まじい早さで知識を吸収していきました。中でも裕福な農家である柴田平蔵が、赤水の江戸遊学や、本の購入を度々手助けしたようです。

それらの読み方に赤水の独創性が表れています。例えば『書経』を一冊読む時、「何ページにこう書いてある」という要点に加えて、

長久保赤水

ながくぼ・せきすい――享保2（1717）年、常陸国多賀郡赤浜村に農家の長男として生まれる。幼名は源五兵衛。15年郷医鈴木玄淳の許で学ぶ。明和5年学問の功により水戸藩の郷士格に取り立てられる。安永8年『改正日本輿地路程全図』完成。安永6年より水戸藩六代藩主・徳川治保の侍講となり、江戸に常勤する。儒学、天文学、地理学等を広く修め著作多数。帰郷後の享和元（1801）年85歳で死去。

長久保赤水顕彰会 会長 佐川春久

さがわ・はるひさ――昭和24年東京都築地生まれ。47年22歳の時、茨城県高萩市に居を移し、市役所に奉職。広報広聴係での市報制作等を通して長久保赤水の事績を知る。平成24年長久保赤水顕彰会会長（三代目）となり、県内外で講演、新聞寄稿を多数行う。監修を務めた映画『その先を往け！日本地図の先駆者長久保赤水』がYouTubeにて公開中。